

降る雪は あはにな降りそ

吉隠の 猪養の岡の 寒からまくに

穂積皇子(巻二・二〇三)

私にとっての奈良の魅力。それは、「万葉集」に詠まれたであろう土地がそこかしこにあることです。もちろん、地名は変わりますし、地名が同じでも「万葉集」に詠まれた場所だと断定することはできない場合も多々あります。それでも、万葉びとたちと同じ場所に立ち、同じ風景を見て

いるのではないかと錯覚する時があります。それが、奈良の魅力であり、「万葉集」の魅力の一つなのだと思います。この歌は、但馬皇女が亡くなった後に、穂積皇子が冬の雪の降る日、はるかに皇女の墓を見やうと、悲しみに涙して作った歌であると題詞に記されています。但馬皇女と穂積皇子は天武天皇の皇子女で、異母兄弟にあたります。巻二の相聞部に

やまと 万葉がたり

は、但馬皇女が穂積皇子への激しい恋心を詠んだ歌が三首(一一四〜一一六番歌)残されています。その題詞には「但馬皇女の高市皇子の宮に在しし時に」(一一四・一一六番歌)とあることから、高市皇子の妻でありながら、穂積皇子と密通したという恋愛事件が、歌物語的に伝えられ

たのだろうと推測されています。その但馬皇女の一途な恋歌に、穂積皇子が応えた歌は伝えられていません。但馬皇女は、和銅元(708)年6月に薨じたと「続日本紀」にあり、この歌はそれ以降に作られたものと考えられます。但馬皇女との道ならぬ関係が世間に露見したところにより、穂積皇子は愛する人の安らかな眠りを願うしかなかったり、そんな土地がたくさんある奈良を、私は誇りに思います。

たのだろうと推測されています。その但馬皇女の一途な恋歌に、穂積皇子が応えた歌は伝えられていません。但馬皇女は、和銅元(708)年6月に薨じたと「続日本紀」にあり、この歌はそれ以降に作られたものと考えられます。但馬皇女との道ならぬ関係が世間に露見したところにより、穂積皇子は愛する人の安らかな眠りを願うしかなかったり、そんな土地がたくさんある奈良を、私は誇りに思います。

【訳】降る雪は多く積もるな。吉隠の猪養の岡に眠っている皇女が寒いだらうものを。

にある岡のことと思われませんが、具体的な場所はわかりませんが、但馬皇女がこの場所のどこかに眠っていて、その墓を穂積皇子が涙しながら眺めていたというドラマを思う時、その場所に行きたくなってしまう、行ってしまおう。そんな土地がたくさんある奈良を、私は誇りに思います。(県立万葉文化館主任 研究員・大谷歩) 次回は27日

春日野の 友鶯の 鳴き別れ

帰ります間も 思ほせわれを

柿本人麻呂歌集(巻十・一八九〇)

冬が終わりに近付くころになると、私には楽しみがあります。万葉文化館の庭で、鶯の初音を聞くことです。今年2月の20日ごろに鶯の初音を聞きました。最初はうまく鳴けなかった鶯も、だんだん上手に「ホーホケキョ」と鳴けるようになっていくのがおもしろいのです。この鳥の初音探しは万葉びとたちを真似してはじめ

たことで、特に大伴家持はホトトギスの初音を聞くことに執心でした。「万葉集」には、「冬も春さり来ればあしひきの山にも野にも鶯鳴くも」(巻十・一八二四)作者未詳という歌もあり、春になると野山に鶯が鳴くことだといふように、古代でも鶯は春を代表する鳥でした。

今日の歌は「友鶯」が鳴き別れていふよう

やまと 万葉がたり

に、泣きながらお別れしたそのお帰りの道中でも、私のことを想ってください、という歌です。おそらく、妻問いの別れの際に、女性が恋人へ贈った歌であると思われまふ。2句目の「友鶯」という言葉は、「万葉集」ではこの歌にしかみられない特殊な言葉です。多くの写本では「大鶯」

となっていて、「イヌウグヒス(去ぬ鶯)」とすべきだという解釈もあります。

この「友鶯」という言葉については、「懐風藻」の「花積智蔵の鶯を翫す」の詩に「友鶯を翫す」とあり、何を求める鶯は樹に嬌き(詩番〇)とあり、

春の素晴らしい風景の一つとして、友を求め鶯が詠まれていきます。この万葉歌の「友鶯」と「懐風藻」の「友鶯」を求めるとは、直接的に「友」が関係があるのかはわかりませんが、何かつながりがあるのではないかと想像して

【訳】春日野の妻を求めて鳴く鶯のようになき別れて、お帰りになる間でも、お思ってください。私のことを。

研究員・大谷坂

〓次回は4月10日

歌集である「万葉集」と漢詩集である「懐風藻」は断絶した世界ではなく、交流しながらそれぞれの世界を作り上げていくのだと私は考えているからです。

「万葉集」の世界には、まだまだわからないことがたくさんあって、だからこそ勉強するの